

## 日本仏教史 19 - 鎌倉仏教 8 日蓮と弟子たち-

## 1、日蓮仏教の誕生

日蓮は貞応元年（1222）安房国長狭郡東条郷片海という村<sup>1</sup>で生まれた。『産湯相承』<sup>2</sup>では父は三国大夫、母は畠山氏となっているが、宗門内では藤原冬嗣の末裔貫名重忠を父とする『長祿寛正記』<sup>3</sup>の説が定着している。

日蓮自身は自身の出生について「海辺の旃陀羅が子」（『佐渡御勘気抄』）「東条方海の石中の賤民が子」（『善無畏三蔵抄』）「東条郷、方海の海人の子」（『本尊問答抄』）と語っている。南北朝時代の大石寺 3 世日道（1283-



法華経寺

1341) の『御伝土代』には「海人子也」とあり、同時代の『法華本門宗要鈔』には「出世の処は安房国長狭郡東条郷小湊浦釣人権頭之子也」とある。「権頭」とは当時の漁村で数名の下人を隷属させていた階層で、領家・地頭からは「浦人」「海人」「百姓」などと呼ばれていた。

昭和 36 年（1961）、千葉県市川市中山にある日蓮宗大本山法華経寺から、120 紙ほどの紙背文書が発見された。そのほとんどが下総国守護千葉頼胤の家臣富木常忍（1216-1299）に宛てた書状である。この中に、日蓮が幼い頃から富木家と交流があったこと、日蓮の父母が領主の妻に恩があることなどが書かれていることから、少なくとも守護職と交流がある家柄であったことが分る。

12 歳で比叡山横川系密教寺院であった安房清澄寺に入っている。この寺の本尊は虚空蔵菩薩であるが、この菩薩像の前で虚空蔵求聞持法という行法を行うと、



波木井の御影（身延山久遠寺蔵）

昭和 36 年（1961）、千葉県市川市中山にある日蓮宗大本山法華経寺から、120 紙ほどの紙背文書が発見された。そのほとんどが下総国守護千葉頼胤の家臣富木常忍（1216-1299）に宛てた書状である。この中に、日蓮が幼い頃から富木家と交流があったこと、日蓮の父母が領主の妻に恩があることなどが書かれていることから、少なくとも守護職と交流がある家柄であったことが分る。

昭和 36 年（1961）、千葉県市川市中山にある日蓮宗大本山法華経寺から、120 紙ほどの紙背文書が発見された。



清澄寺

1、現在は地震により水没してしまっている。この村は、海に突き出した岩盤の上にあったため、農業や漁に適しておらず、今でもこの地域の名産である浅草海苔やひじきなどの海草によって生計を立てていたと思われる。

2、長祿 2 年（1458）に日蓮正宗大石寺 9 世法主日有が語ったのが初見。

3、日親（1407-1488）の作。

満願の日に明星が口から入り、知恵が明瞭になるとされている。後に日蓮は「清澄寺大衆中」宛ての書状に「生身の虚空蔵菩薩より、大智慧を給わりし事ありき。日本第一の智者となし給へと申せし事を、不便とや思しめしけん。明星の如くなる大宝珠を給いて、右の袖に受け取り候し故に、一切経を見候いしかば、八宗ならびに一切経の勝劣<sup>あらあら</sup>粗是を知りぬ」と書いていることから、虚空蔵求聞持法を行っていたことがわかる。

16歳で清澄寺の住職で念仏者であった道善房を師として出家し、是聖（生・性）房蓮長と名乗った。17歳の時、初期の天台本覚思想文献である『授決円多羅義集唐決』を<sup>じゆけつえん たらぎ しゆうとうけつ</sup>書写している<sup>4</sup>。

この後、4年間鎌倉で遊学し清澄寺に帰ると、修学の成果として台密教義に基づく『戒体即身成仏義』を著している。この中には、浄土宗は仏教ではないという批判や「娑婆即寂光土」「凡夫即身成仏」などの教理、妙法の受持がそのまま持戒であり即身成仏を成就させるという、後の日蓮思想の基本がすでに説かれている。

この後、比叡山横川の寂光院に遊学した蓮長は、23歳の時に『色心二法抄』を著している。この中で「生死を厭いて生死なき浄土を求め」ることや「生死は虚妄なりと観ずる人」を「理」を知らぬ者であると悲嘆している。当時京都では、諸行を認めた証空系浄土宗が延暦寺と和解し勢力を拡大しはじめていた。浄土宗に批判的であった蓮長は、易行としての天台宗を模索していた可能性がある。建長3年（1251）に五条坊門富小路の小庵で、真義真言宗の祖覚鑊の『五輪九字明秘密釈』を書写していることから、ここに書かれている真言宗系の曼荼羅を参考にして、後に題目を陀羅尼本尊とする日蓮風の曼荼羅が生まれてきたと考えられる。

建長5年（1253）に清澄寺に帰った蓮長は、師の道善房を相手に浄土教を批判し、法華経こそが成仏の法であるとの自説を展開して、名を日蓮と改めている。この地の地頭であった東条景信が念仏者であったため、翌年、日蓮は清澄寺を追われている。房総地方の天台系寺院を回りながら、日蓮が落ち着いたのが、下総の八幡荘にあった守護所であった。これは、日蓮にとっての最初の法華信者である富木常忍が下総守護千葉頼胤（1239 - 1275）の家臣であったことによる。この建長6年（1254）には、浄土宗の実質的な祖である念阿良忠

（1199-1287）も下総に入っている。この地で『選択伝弘決疑鈔』五巻を撰述した良忠は、千葉一族の支持を受けて下総から上総・常陸にまで勢力を拡大させていった。このような状況の中で、

<sup>4</sup>、奥書に「嘉禎四年太蔵戊戌十一月十四日 安房国東北御庄清澄寺道善房 東面にて執筆 是聖房十七才 後見の人々 是を非謗することなかれ」と記されている。



寂光院



岩本実相寺

専修念仏を批判する日蓮が受け入れられるはずもなく、遅くとも正嘉元年（1257）頃までには鎌倉松葉ヶ谷の草庵に移っている。この後を追うように、千葉氏との間に亀裂が入った良忠も、文応元年（1260）頃鎌倉入りしている。当時の鎌倉は北条時頼が病で執権を北条時長に譲ってはいたが、実権は時頼が持ったままであった。時頼は臨濟宗の蘭溪道隆（1213-1278）や真言律宗の叡尊（1201-1290）に帰依していたため、良忠や日蓮が簡単に布教できるような状況ではなかった。

正嘉元年（1257）8月、鎌倉を大地震が襲った（正嘉地震）。『吾妻鏡』<sup>5</sup>によると、この後文応元年（1260）にかけて大地震・暴風雨・洪水・大火・疫病・飢饉などが頻発していたことが分かる。『立正安国論』にも「近年より近日に至るまで、天変地夭、飢饉疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩、既に大半に超え、之を悲しまざるの族、敢えて一人もなし」と書かれている。日蓮の草庵も被害を受けたことから、駿河国岩本実相寺に避難し、ここの経蔵に籠り一切経を閲覧したという。ここで、日蓮はこれら災害の原因が『法華経』に基づいて政治がなされていないことと、日本の仏教が『法華経』から念仏や禅に走っている変わってしまったことであると確信した。この根拠と対処法を經典から抜き出して編纂したのが『立正安国論』である。

『立正安国論』は、北条時頼を想定した「客」と日蓮である「主人」の会話問答形式で、10段に分けて書かれており、現在の災害の元凶である浄土宗を禁止し、天台宗を中心とする伝統仏教を復興することを鎌倉幕府に求めた内容となっている。

- |         |                              |
|---------|------------------------------|
| 第1段～第3段 | 災害の理由を一般論で論じている。             |
| 第4段～第6段 | 法然の浄土宗こそが災害を招く邪教であることを説いている。 |
| 第7段～第9段 | 現在の災害に対する対処の方法を論じている。        |
| 第10段    | 結                            |

第9段で「主人」は「汝早く信仰の寸心を改めて、速やかに実乗の一善に帰せよ。しかればすなわち、三界は皆、仏国なり。仏国はそれ衰えんや。十方は悉く宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微なく、土に破壊なくんば、身はこれ安全にして、心はこれ禅定ならん」ことを「客」に求めている。文応元年（1260）、宿屋入道最信を通して前執権北条時頼に呈上されたが、宿屋入道は時頼に内容を簡略に説明しただけで日蓮に返したと思われる。ここで日蓮が行おうとした、政治権力者に信仰させようという方法を「国主諫曉」という。

## 2、日蓮の法難

『立正安国論』は幕府に黙殺されたが、この内容に反発した浄土宗信徒によって松葉ヶ谷の草庵は襲撃されてしまう（松葉ヶ谷の法難）。これを逃れた日蓮は、下総の富木常忍の屋敷に避難したという。

<sup>5</sup>、鎌倉幕府の初代将軍・源頼朝から第6代将軍・宗尊親王まで6代の将軍記。



事件が沈静化すると日蓮は鎌倉に帰っている。翌年の弘長元年（1261）、幕府は「関東新制条々」を制定し、神事や仏事を厳粛に行うことを求める一方、これに従わない僧を鎌倉から追放することを決めた。これにより、日蓮は伊豆流罪となる（伊豆流罪の法難）。日蓮はこのことを「去ぬる弘長元年太蔵<sup>かのとり</sup>辛酉五月十三日に、御勘気をこうむりて、伊豆国伊東郷というところに流罪せられり。兵衛介頼朝<sup>ひょうえのすけ</sup>のながされてありし処なり。さりしかどもほどもなく同き三年太蔵<sup>かのとり</sup>癸亥<sup>みずのとい</sup>二月に召し返されぬ」（『一谷入道御書』<sup>いちのさわ</sup>）と記している。

文永元年（1264）、43歳となった日蓮は流罪を許され安房に帰ったが、ここで東条景信の手の者に襲撃された（小松原の法難）。この時、弟子一人が殺され、日蓮も頭に傷を受けた。治療を終えると、文永3年（1266）、日蓮は再び鎌倉に帰った。

文永5年（1268）1月、日蓮47歳の時、高麗からの使節団が「大蒙古国皇帝奉書」と「高麗国王書状」を携えてきた。蒙古と日本が使者を送り合い親睦をはかろうというものであるが、もしこれを受け入れなければ兵を送るという高圧的なものであった。これらの書状は京都から鎌倉に送られたが、日蓮が法鑑という僧に宛てた『案国論御勘由来』には「而るに勘文を捧げて已後九ヶ年を経て、今年後の正月大蒙古国の国書を見る。日蓮が勘文に相叶うこと宛かも符契の如し」と、日蓮がこれを直接見たと書いてある。



大蒙古国皇帝奉書

この書状が『立正安国論』の正しさを証明するものであると受け止めた日蓮は、宿屋入道に時頼と面会できるよう求めたが実現しなかった。そこで自ら『立正安国論』を書き写し各所に送っている。更に、北条時宗、平頼綱らの幕府要人のほか、極楽寺の忍性（良観、1217 - 1303）<sup>6</sup>、建長寺の蘭溪道隆（1213-1278）ら鎌倉仏教界の主要僧侶に対して書簡を送り、諸宗との公場対決を要求した（「十一通御書」）。この中で、日蓮は「念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊」という「四箇格言」といわれる他宗批判を行っている。これに対して、幕府は日蓮の主張を無視し、むしろ日蓮教団を幕府に従わない危険集団と見なして教団に対する弾圧を検討し始めた。一方で、蒙古来襲の予言を的中させたことが噂になり、多くの弟子や信徒が日蓮のもとに集まって来た。門弟は本弟子といわれる6人に日家・日保が加わり、檀家も富木常忍・工藤吉隆・大学三郎・四条頼基・池上宗仲・南条兵衛七郎・大田乗明ら260名を数えるまでになっている。日蓮の布教方法は鎌倉市中での辻説法であったといわれる<sup>7</sup>。この時、日蓮が行ったといわれるのが「折伏」（正確には「折破摧伏」<sup>しやくぶく</sup>）とい

<sup>6</sup>、関東における真言律宗の中心人物。非人の労働力を組織化することで道路や橋の建設、港湾の維持管理などの事業を行った。

<sup>7</sup>、現在鎌倉に「日蓮大士辻説法之霊跡」と刻まれた石碑がある。

う、正しくない教えを折り臥せることで正しい法を授けるというものであった<sup>8</sup>。

文永8年(1271)6月、幕府が忍性に祈雨の祈願を要請したことを知った日蓮は「7日の間に雨が降るならば日蓮が忍性の弟子となるが、降らないならば忍性が法華經に帰依せよ」と降雨祈願の勝負を申し出たが、忍性はこれに応じていない。この年に浄土宗の行敏が書いた『行敏訴状御会通』には、日蓮が「年来の本尊・弥陀・観音等の像を火に入れ水に流」したと書いており、忍性も日蓮が「凶徒を室中に集」めたと幕府に訴えている。これに日蓮は「法華經守護の為の弓箭兵仗は、仏法の定むる法なり」と武装させた信徒を集めていたことを認めていることから、日蓮と他宗との対立が相当に陰悪なものとなっていたことが分かる。

この対立を危惧した幕府は日蓮を召喚した。この時、日蓮は評定所で平頼綱<sup>9</sup>(?-1293)に「一切の念仏者・禅僧等が寺塔をば焼きはらいて、彼等が頸をゆいのはまにて切らずば、日本の国は必ずほろぶべし」(『撰時抄』)と諫言している。これを受けて、日蓮は鎌倉の市中引き回しの後、竜の口の刑場へ送られた(「竜の口の法難」)。ここでの処刑は火球と思われる自然現象によって逃れたが、佐渡に流罪となっている。

日頂<sup>にっちょう</sup>(1252-1317)・日興<sup>にっこう</sup>(1246-1333)など数人の弟子が随行していたものの、佐渡の配所である塚原三昧堂は、名前の通り墓(塚)のある野原に建てられた粗末な小堂でしかなかった。関東に残った門弟たちへの弾圧も激しかったようで、後に日蓮が『新尼御前御返事』の中で「千が九百九十九人は墮候」と書いているほどである。

配所に到着した日蓮は直ちに「有縁の弟子」への「かたみ」として『開目抄』を書き始めている。これは配所の環境が想像以上に厳しかったこと以上に、日蓮の教えが正しいのであれば、なぜ日蓮とその門下に加護がなく迫害を受けてしまっているのかという、門弟たちの間で広がっていた疑問に答える必要があったためである。日蓮はこの中で、まず末法の衆生が帰依すべき教えを、儒教・外道(仏教以外のインド思想)と内道(仏教)(内外相對)、大乘教と小乗教(大小相對)、大乘の中でも法華經とそれ以外の經(權實相對)、法華經の中でも前半(迹門<sup>しやくもん</sup>)と後半(本門)(本迹相對)、本門の中でも文上本門と文底本門との勝劣(種脱相對)と5つに分けて(「五重相對」)、法華經の文底本門の教である南無妙法蓮華經こそが末法に弘通すべき唯一の正法であることを説いている。そして、諸宗はこの教の浅深勝劣を知らないがために謗法を犯してしまっていると主張している。また、主・師・親の三徳を兼ね備えた釈迦が一切衆生の大導師であったのは釈迦在世の時の話であり、この末法の現在では日蓮こそが三徳具備の大導師であり、末法の弘教を附属



竜の口法 難護国寺

<sup>8</sup>、これに対して教えようとする法を正面から穏やかに説くことを「摂取納受」または約して「摂受<sup>しやくじゆ</sup>」という。

<sup>9</sup>、8代執権北条時宗・9代執権北条貞時の執事。時宗死後に対立した有力御家人の安達泰盛を霜月騒動で滅ぼし貞時を擁したが、貞時の命によって誅殺された(平禅門の乱)。

された上行菩薩であると述べ「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の船とならむ」という誓願を立てている。これを三大誓願と呼び、主（柱）・師（眼目）・親（大船）の表明と解されている。

日蓮の正しさを論じたうえで、法華經の行者に諸天善神の加護がない理由を 4 つあげている。

- 經文や歴史上の先人の例に照らして、行者が難を受けるのはむしろ当然である。
- 行者が難に遭うのは、行者自身に謗法の罪があるからである。
- 迫害者に順次生に地獄に墮ちる重罪がある場合には、現世に現罰は現れない。
- 行者に諸天の加護がないのは、諸天善神が謗法の国を去っているためである。

文永 9 年（1272）、日蓮の配所が塚原三昧堂から一谷<sup>いちのさわ</sup>に移された。この頃、門下の中に日蓮の赦免を幕府に嘆願しようとする動きがあったが、日蓮はこれを厳しく禁じている。

文永 10 年（1273）、日蓮は自身が図顕した文字曼荼羅本尊の意義を明かした『観心本尊抄』を著した。この前半で日蓮は、智顛が『摩訶止観』<sup>10</sup>で説いている一念三千<sup>11</sup>と、草木成仏<sup>12</sup>を根拠として、紙や木の板に書かれた曼荼羅が仏の力を持っていると主張している。次に、一切の仏は妙法によって成仏しているので、衆生も妙法を受持することによって仏の功德を受けることができるという。後半では題目の五字である「妙法蓮華經」こそが末法における唯一の法門であるとしている。つまり、曼荼羅本尊を受持して「南無妙法蓮華經」の唱題を行わずにより、誰もが仏になれるというのである。実際に、日蓮は「佐渡百幅」といわれるほど多くの曼荼羅本尊を門下に授与している。



曼荼羅本尊 立正山妙法寺

日蓮は佐渡での体験を『三沢抄』で「法門の事は、佐渡の国へ流され候いし已前の法門は、ただ仏の爾前の經とおぼしめせ。（乃至）いぬる文永八年九月十二日の夜、竜の口にて頸をはねられんとせし時よりのちふびんなり。我につきたりし者どもに、まことの事を言わざりけると思いて、佐渡の国より弟子どもに内々申す法門あり」と語っていることから、大きな思想的転換点となったことがわかる。流人の身でありながら、2年5か月に渡る佐渡での生活の中で、阿仏房夫婦・一谷<sup>いちのさわ</sup>入道・国府<sup>こう</sup>入道・中興入道ら新たな門弟も生まれている。

10、仏教の論書の1つで、止観（止は三昧、観は智慧）を意味する。智顛が仏教の瞑想法を講義したものを弟子がまとめたもの。10巻。5天台三大部の1つ。

11、智顛の言葉で、人間の日常の一瞬一瞬のかすかな心の動きに、三千の数で現された宇宙の一切のすがたが完全にそなわっているということを示す。これを日蓮は、題目の一念に三千世界の仏の功德が宿ると解釈した。

12、中国で生まれた教理解で、草木のような心がないものでも仏になれるということ。空海以降、日本仏教では重視され本覚思想の基礎となっている。



### 3, 身延山への遁世から死去

文永 11 年 (1274)、赦免され鎌倉に帰った日蓮は、翌年 4 月、平頼綱と会見し蒙古来襲について論じたがやはり相手にされなかったため、翌 5 月には檀家である南部実長の所領、甲斐身延山に遁世してしまう。

この半年後の文永 11 年 (1274) 10 月に、3 万数千人の元・高麗軍が対馬と壱岐島の上陸に成功し、さらに博

多湾に攻め寄せた (文永の役)。戦闘は一週間ほどで終了したが、日本側は深刻な被害を受けた。



蒙古襲来絵詞



身延山久遠寺

この直後に日蓮は『聖人知三世事』で「日蓮は一閻浮提第一の聖人也。上一人より下万民に至るまで、これを軽毀して刀杖を加へ、流罪に処するが故に、梵と釈と日月四天と隣国に仰せ付けて、これを逼責するなり」

と記している。翌建治元年 (1275)、日蓮は『撰時抄』の中で、蒙古襲来は日本国が法華經の行者を迫害したために諸天善神が日本国を罰したのであるから、法華經に従わない鎌倉中の寺や鎌倉大仏を焼き払い、禅僧・念佛僧を由比ヶ浜でことごとく処刑することを求めた。また、法華經に従わないばかりか真言僧に敵国降伏の祈祷をさせている日本が滅亡するのは当然のことであり、かえって滅亡を契機にして日本に妙法が流布することは喜ばしいことであるとしている。さらにこの書の中で日蓮は、末法は釈尊の「白法」が隠没し、それに代わって南無妙法蓮華經の「大白法」が流布する時代であるとし、このことを明確にするために、従来から否定していた念佛・禅・真言に加えて、日本天台も滅ぼす必要があるとしている。そして第 3 代天台座主円仁を安然・源信と並べて「師子の身の中の三虫」と断じている。一方で日蓮自身については「日本第一の行者」「日本第一の大人」「一閻浮提第一の智人」と述べている。さらに建治 2 年 (1276) に師の道善房の死去に伴い書いた『報恩抄』では、第 5 代天台座主円珍を批判し空海の靈験までもが欺瞞であると述べている。

蒙古来襲が現実のものとなって以降、関東各地や佐渡の門弟たちを通して、多くの布施が身延山に届けられるようになった。駿河では日興によって熱原あつはら滝泉寺・岩本実相寺などの僧が帰依し、地元の百姓にも信徒が増えていった。これに反発した住職たちは、日蓮の門下となった僧たちを追放したが、納得できない日蓮門流との間で抗争事件にまで及んだ。滝泉寺院主代行智がこれを幕府に訴えたことから、日興の信者であった百姓 20 人が捕らえられ、そのうち 3 名が処刑されている (熱原法難)。

弘安 2 年 (1279 年) 3 月に蒙古は南宋を滅ぼしている。弘安 4 年 5 月、高麗のがっぽ谷浦を出発した蒙古・高麗の東路軍 4 万が対馬・壱岐の上陸に成功し、6 月 6 日には博多湾に上陸作戦を開始

した。

7月初旬、平戸島付近で旧南宋兵士の江南軍 10 万が合流したが、閏 7 月 1 日、大型台風の直撃を受け退却している（弘安の役）。この台風は真言僧の祈祷により起きたとされ、神風と呼ばれるようになる。予言が外れたかたちになった日蓮は『富城入道殿御返事』で門下に対して蒙古襲来について広く語るべきではないと厳しく戒めている。

弘安 5 年（1282）体調を崩した日蓮は安房への帰郷と常陸の湯治のために山を下りたが、病状が悪化し池上宗仲の屋敷に入り 61 歳で死去している。翌日茶毘に付されると、遺品は 28 人の出家、6 人の在家の弟子に分配されている。遺言により廟所は身延山に作られ、本弟子とされる 6 人により輪番勤仕されることになった。



池上本門寺

## 4、日蓮の独自性

『法華経』には「経」を受持する功德は説かれているものの「経」の題名を唱える「唱題」は説かれていない。智顛は『法華三昧懺儀』の中で「南無妙法蓮華経」を唱えることを勧めているが、これは諸仏諸菩薩の称名念仏と並んで勧めているもので、特に『法華経』の題目を特別なものとはしていない。日本でも平安時代から智顛の勧めにより「南無妙法蓮華経」と唱えてはいたが、智顛の教え通り「南無阿弥陀仏」「南無観世音菩薩」と合わせて唱えられていた。日蓮が「妙法蓮華経」の 5 文字を受持（唱題）するだけで、衆生は仏の功德を自然に譲り与えられると考えたのは、易行である法然の専修念仏に倣ったものと思われる。日蓮は『観心本尊抄』の中で「一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起し、五字の内にこの珠を裹<sup>つ</sup>み、末代幼稚の頸に懸さしめたまう」と、唱題とは単に『法華経』を信じているという表明ではなく、その功德によって仏と衆生を同等にし、即身成仏を成就させるものであると述べている。この考え方は特定の師を持たない日蓮が宗教体験から得た独自のものである。

題目と並んで日蓮が教えの要としているのが本尊と戒壇である。日蓮 60 歳の最晩年の著作とされる『三代秘法抄』の中で『法華経』本門寿量品の本尊・戒壇・題目を三大秘法としている。戒壇について日蓮はこの中で「戒壇とは、王法、仏法に冥<sup>ない</sup>じ、仏法、王法に合して、王臣一同に本門の三大秘密の法を持ちて、有徳王・覚徳比丘の其乃往を末法濁悪の未来に移さん時、勅宣並びに御教書を申し下して、靈山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて、戒壇を建立すべきものか。時を待つべきのみ。事の戒法と申すは是なり。三国並びに一閻浮提の人、懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王・帝釈等も来下して躡<sup>ふ</sup>給ふべき戒壇なり」としており、これが、国立戒壇論の根拠とされている。ただし『三代秘法抄』の日蓮自筆本はない。

日蓮の初期作である『守護国家論』では「法華や涅槃を修する者がいる場所を浄土と思うべきである。どうしてわざわざ他の世界を求めなければならないか」と法然の極楽浄土への往生を否定している。しかし、佐渡で書いた『開目抄』では「今、爾前迹門にして十方を浄土とごうして、



この土を穢土ととかれしを打ちかえして、この土は本土となり、十方の浄土は垂迹の穢土となる」とこの世こそ浄土であるとしながらも、同時に「私は法華經の信心を破らずに靈山に参り、還つて導くように」「日蓮の流罪は小さな苦であるから、嘆かわしいことではない。来世では大きな楽を受けるのであるから、大いに喜ばしい」と死後の世界として、<sup>りょうぜん</sup>靈山浄土という独自の浄土に言及している。釈迦が『法華經』を説いたとされている場所が<sup>りょうじゆせん</sup>靈鷲山である。日蓮は、これを釈迦の浄土とし、さらに来世の浄土としても考えるようになった。この傾向は佐渡から帰って以降顕著となり『上野殿母尼御前御返事』では「このように情けない国を厭い捨て、(中略)常住で不壞なる靈山浄土へ早くお参りなさい」と、流罪以降 死後の浄土としての「靈山浄土」への往生を勧めるようになっている。

## 5、日蓮の弟子たちの動向

日蓮の弟子の中でも有力な6人の弟子は本弟子（六老僧）と呼ばれている。

- 日昭（1236-1323）もと天台僧。鎌倉浜の法華堂（のちの法華寺）を拠点に布教し、その門流を浜門流（日昭門流）とよぶ。
- 日朗（1245-1320）鎌倉<sup>ひきがやつ</sup>比企谷の法華堂（のちの妙本寺）を拠点とし、日蓮の死後には下総の檀家曾谷氏の援助で平賀本土寺を開き、さらに日蓮の7回忌法要の時に池上宗仲と伴に御影堂（のちの本門寺）を造ったことで、法華教団の中心的な地位を占める比企谷門流（日朗門流）の基礎をつくった。
- 日興 日蓮在世中から、甲斐・駿河・伊豆で布教していた。身延山廟所で輪番勤仕が行われなくなつてからは常駐して経営にあたった。しかし、身延山の檀家波木井実長・学頭日向と対立し富士郡に移ると、駿河上野の南条時光の援助で大石寺を建て、さらに北山の石川能忠の援助で本門寺を開くところに移った。さらに重須に隠棲した日頂を学頭として招き、教学の振興をはかっている。ここを中心に富士門流（日興門流）の基礎を築いた。
- 日向（1253-1314）<sup>にこう</sup>齋藤兼綱の援助を受けて上総茂原で布教していたが、日蓮没後は身延山で学頭として門弟の教化にあたった。日興と対立し、日興が身延山を下りた後、身延山久遠寺の基礎を築いた。晩年、久遠寺を日進にゆだね、茂原妙光寺に隠棲したことから、この門流を茂原門流（日向門流）と呼ぶ。
- 日頂 日蓮没時には下総<sup>ましま</sup>真間弘法寺を拠点にしていたが、若宮法華寺の日常と対立したことで駿河<sup>おもす</sup>重須に隠棲した。若宮法華寺を託された日高は生家を本妙寺（のちの中山法華寺）とし両寺を兼帯し、真間弘法寺を継承した日楊とともに中山法華寺門流の基礎を確立した。
- 日持（1250-?）日蓮が死去した時は、駿河の松野で松野六郎左衛門の援助で建てた永精寺を拠点に布教していたが、直接の師である日興と不和になると、弟子の日教に寺を任せて奥州から蝦夷に渡りその途中で死去している。

これら本弟子のほか、日源 (?-1315) は武蔵<sup>ひもんや</sup>碑文谷法華寺・谷中<sup>ぞうしがや</sup>感応寺・雑司谷法明寺を開き、本弟子と方便品不読を主張し対立した天目 (1256-1337) は鎌倉円成寺・品川妙国寺・下野佐野妙顕寺・常陸<sup>おがち</sup>小勝本門寺を開いた。日家 (1258-1315) ・日保は佐久間重貞の支援で興津<sup>おきつ</sup>妙覚寺・小湊誕生寺を開き、両山一寺とした。天目に同調した日弁 (1239-1311) は上総<sup>じゆせん</sup>鷲津鷲山寺・下総峯妙興寺を開いた。日門は常陸水原妙光寺・陸奥大仙寺を立てている。日位は駿河村松海上寺・池田本覚寺を、日伝は甲斐小室妙法寺を、日法は甲斐休息立正寺・駿河岡宮光長寺を立てている。この様に、日蓮没、各門流に分立したが、さらに法華経本門と迹門をめぐる勝劣・一致の教理分立、伝道における摂受・折伏の問題から、日蓮の門流は現在に至るまでまとまることはなかった。

日興には本六人といわれた日華<sup>にっけ</sup> (1252-1334) ・日目 (1260-1333) ・日秀 (?-1329) ・日禪 (?-1331) ・日仙<sup>にっせん</sup> (1262-1357) ・日乗 (?-1318) と新六人とよばれた日代 (1294-1394) ・日澄 (1262-1310) ・日道 (1283-1341) ・日妙 (1285-1365) 日郷 (1293-1353) ・日助 (?-1387) ら多くの門下がいた。彼らは鎌倉方とよばれた日昭・日朗の門流、天目門流、身延山と対立しながら、東は東北、北は佐渡、西は四国から山陰にいたる各地で伝道していった。日興は重須本門寺を日代に、大石寺を日目に託すと元弘 3 年 (1333) に死去している。その翌年、建武元年 (1334) 日華のあと讃岐法華寺を継いでいた四国富士流頭梁の日仙と日代が方便品の読・不読の問答で対立した。これにより日代は重須を追われ西山本門寺をたてたため、本門寺が二分することになる。讃岐でも日仙に法華寺を託した日華が下条に妙蓮寺を開き分立し、大石寺も日目のあと、日道と日郷が対立することになる。3 年に及ぶ抗争の末、日道が大石寺を継承し、日郷は安房に移りこの派は小泉に久遠寺を立てた。このため、日興門流は、両本門寺・大石寺・妙蓮寺・久遠寺に分流したことから富士五山といわれることになる。

日興門流と匹敵する広がりを持ったのが日朗門流であった。日朗は比企谷妙本寺と池上本門寺を治部公日輪に託すと元応 2 年池上で死去したが、その門下に朗門九鳳とよばれた日像 (1269-1342) ・日輪 (1272-1359) ・日善・日伝 (1247 - 1341) ・日範・日印 1264-1329) ・日澄 (1239 - 1326) ・日行・日慶らがいた。関東を拠点に、東北から北陸近畿に教線を拡大させた。日像は建治元年 (1275) 日朗の門に入った後、身延山で日蓮の下で学んでいる。日蓮の死後、肥後房日像と称し、永仁元年 (1293)、上洛して教化することを決めると、小湊から清澄・小松原・身延山・佐渡と日蓮の遺蹟を巡拝し、北陸道に入る。能登で真言僧満蔵を折伏したが、この僧が滝谷妙成寺開山となる日乗である。これにより加賀能登越前若狭が妙顕寺の主要末寺分布圏となる。京都に入った後、綾小路大宮に法華堂を立て信徒を増やすが、徳治 2 年 (1307) 諸宗からの反発を受けて佐渡流罪となる。この後赦免と流罪を繰り返したことで、三黜三赦と呼ばれるようになる。元弘 3 年 (1333)、法華堂は後醍醐天皇の京都還幸を祈念すべき護良親王の令旨を得て妙顕寺の寺号を得、建武元年 (1334) に日蓮門流初の勅願寺となる。暦応 4 年 (1341) に妙顕寺は四条櫛笥西類地一町に移転したことから、妙顕寺の門流は四条門流と呼ばれるようになる。この門流は京都の裕福な商工人信徒を獲得していった。日像から妙顕寺を継承した大覚はさらに備前・備中・備後を中心とする瀬戸内地域に教線を拡大している。